

げんぺいぬのびきのたき

源平布引滝

〔解説〕

寛延二年（一七四九）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛による五段続きの時代物です。平治の乱以後、再興を期す源氏の武将らを中心に人々の思いが複雑に絡み合って描かれています。源義朝の弟義賢の最期を描いた二段目「義賢館」、平家方なれども源氏再興を密かに願う者達を描いた三段目「九郎助住家」がよく知られています。

〔あらすじ〕

平治の乱で源氏を破った平清盛は、源氏の再興を恐れて一族の男子を根絶やしにせんと躍起になります。木曾義賢（きそよしかた）の妻葵御前が身重であったことから、葵御前を匿う九郎助の元にまで詮議が及びます。平

家家臣の斎藤実盛（さいとうさねもり）と瀬尾十郎（せのおじゅうろう）が、葵御前から生まれた子と見せられたのは、女の腕でした。もはや逃れられない状況でしたが、実盛が唐の国の故事を引き合いに出してその場をしのぐことができました。

《実盛物語の段》瀬尾十郎は納得せず陰で成り行きを窺っていました。腕が九郎助の娘小万（こまん）の腕であると判明し、実盛はそのいきさつを物語ります。木曾義賢から源氏の白旗を預かった小万は、平家の兵に追われて琵琶湖に飛び込み、溺れかかったところを、平宗盛の船に助け上げられますが、源氏方の女と露見して白旗を奪われそうになります。船に乗り合わせた斎藤実盛が旗を持つ小万の腕を切り落とし、白旗は小万の腕もろとも流れていったのです。そうするうちに葵御前は後の木曾義仲となる男子を産みます。そして事の真相を知った瀬尾十郎が再び姿を現すのですが、小万の遺児太郎吉に討たれます。瀬尾は小万の実の父であり、孫に手柄を立てさせ、生まれたばかりの若君の家来となれるよう、わざと手にかかったことを告げて息絶えるのです。

実盛物語の段

泣き出す心根を

思ひやつて実盛

「さてはその方達が娘よな。聞きも及ばん宗盛公、
竹生島詣下向の御船、勢田唐崎の方へ漕ぎ出す所に
矢橋の方より二十余りの女、口に白絹引き銜へ、
抜き手を切つてさつくと、浮いつ沈みつ泳ぎ来る。

『あれ助けよ、あれ殺すな』と、舷叩いて焦れど

も、折から比叡の山おろし、柴舟の助けもなく、水

に溺れる不憫さに、三間櫂を投げ込んで、念なう御

船へ助け乗せ、『コリヤ如何なる者ぞ』と尋ぬるう

ち、追手と見えて声々に『その女こそ源氏方、白旗

隠し持つたるぞ。奪い取れ』と、呼ばはる声を

聞きしより、船に居合わす飛驒左衛門飛びかゝつて

『もぎ取らん』『イヤ渡さじ』と女の一念。『もし

や白旗平家へ渡らば、末代まで源氏は埋れ木。女が

命に代えられず』と、白旗持つたる肘をば、海へざ

んぶと斬り落とし、水底へ沈みしと船を汀へ漕ぎ戻

し、骸は陸へ上げ置きしが、廻り廻つてこのうちへ、

白旗もろとも帰りしは、親を慕ひ子を慕ひ、流れ寄

つたか不憫や」

と涙交じりの物語

「三人かゝつて離れぬ白旗、心よう放したは、我が

子に手柄させたさか、死んでもそれほど可愛い、か

手に留まつた一念が、物云ふことはならぬか」

と御台もろとも取り縋り、泣くより他の事ぞなき。

実盛始終手を拱き、人々の愁嘆に、涙と浮む一工夫

思ひ付いて傍に立寄り

「かく甲斐々々しき女、たとえ片腕斬つたりとて、

即座に息も絶えまじきが、白旗を渡さじと、一心腕

に凝り固まり、五臓に残る魂なし。再び肘を接ぎ合はさば、靈魂返り息することもあらん。誠にかの眉み

けんじやく

間 尺が首、三日三夜煮られても、凝つたる一念恨みを報ぜし例もあり。今この肘に温り有るも不思議。又は御旗の威徳も」

と、斬つたる肘に白旗持たせ、物は試しと接ぎ合はせば、我が子を慕ふ魂魄も、御旗の徳にや立ち帰り、息吹き返し目を開き

「太郎吉何処にぞ、太郎吉」

と云ふに、びつくり

「ヤレ蘇つたは、此処に居る、此処に――」

と取り纏る

「ナウ御台様、白旗は御手に入つたか。太郎吉にたつた一言云ひたい事が」

とばかりにて、いまぞはかなくなりにつけり

「コリヤ小まんやい」

「コレ小まんいのう」

「小まんやい――、ハア可愛や――、生き返つたがなほ思ひ、あんまりこれは胴欲な、本意ない別れ」

と取り付いて、わつとばかりに泣き居たり。いつの間にかは瀬尾十郎、小柴垣より現れ出で

「ヤアそりやならぬ――。かくあらんと思ひし故、

死骸を持たせ窺ひ聞く。義賢が倅せがれ、男子とあれば

見逃しならず。いで請け取らん」

と駆け入れば、実盛やがて立ち塞がり

「ア、これ――瀬尾、貴殿も生き通しにもせまい。

海とも山とも知れぬ水子、見逃しやるが武士の情」

「ヤア云ふな実盛。さては汝二心な、自体このくたばつた女めが、白旗奪い取つたる故、平家方は夜が

寝られず、思へば／＼重罪人め」

と死骸を立蹴たちげにはつたと蹴飛ばし

「サア生まれた餓鬼めを渡せ／＼。異議に及ぶと撫で斬り」

と飛んでかゝるを、太郎吉が母の譲りの九寸五分、抜くより早く瀬尾が脇腹、ぐつと突いたる小腕の力。

これはと人々驚く中。暫くあつて瀬尾十郎

「何と葵御前、これで太郎吉は、駒王殿の御家来にサアならふがの。初めての御家来に、平家の縁と嫌われては、娘が未来の迷ひと云ひ、一生埋もれる土百姓。七つの年から奉公せば、木曾の身内に一と云ふて二のなき家来。とりなし頼む／＼実盛殿。サア瀬尾が首取つて、初奉公の手柄にせよ」

と、非道に根強き侍も、孫に心を乱れ焼き。スラリと抜いてわが首へしつかと当てゝ両手を掛け

「エイ／＼／＼」

と引き落とす。難波瀬尾と平家でも悪に名高きその一人、最期はさすが健気なり。夫婦は泣く／＼その首を太郎に持たせ御目見得、葵御前は若君抱き

「初めての見参に、平家に名高き侍を討取つたる功名、主従二世の奇縁ぞ」

と仰せを、聞くより太郎は突つ立ち

「サアこれからは俺は侍。侍なれば母様の敵、実盛やらぬ」

と詰めかけたり

「オ、あつぱれ／＼さりながら、四十に近き某が、幼き汝に討たれなば、情けと知れて手柄になるまい。若君ともろともに、信濃国諏訪へ立越へ、成人して義兵を挙げよ。その時実盛討手を乞請け、故郷へ帰る錦の袖、翻して討死にせん。まづそれまではさら

ばく、いづれもさらば。家来共、乗り換へ引け」と呼ばれば、『ハッ』と答えて月額、栗毛の駒を引出す。手綱押取り乗る中に、何処に隠れ居たりけん、矢橋仁惣にそうた太躍り出で

「ヤア先達で注進の褒美を無にしたその代はり、実盛が二心で駒王丸を北国へ下す段々、すぐに注進、詞番ことばんふた争ふな」

と云ひ捨てゝ駆け出す。実盛すかさず馬上より、用意の鍵縄打掛くれば、首に掛かつてきりくく、引寄せ引上げ引掴み

「あつぱれ己は日本一の太慾無道の曲者め」
だいきふど

と、鞍の前輪へ押付けて、首搔斬つて捨てゝンげり。その後手塚太郎、母が形見の小合口、金刺取つて腰にぼつ込み、綿繰馬にひらりと乗り

「ヤアく実盛、母様殺して逃ぐるか往ぬか、もう

俺が名は手塚太郎、コリヤコノ金刺の光盛なり。往なずと此処で勝負々々」

と呼ばはったり

「ヲくでかいたく。蛇は寸にしてその氣を得る。自然と備はる軍の広言。成人して母の仇、顔見覚えて恨みを晴らせ」

「イヤく申し、孫めが大きうなる内には、其許様は顔に皺、髪は白髪でその顔変はろ」

「ムウくくハハハハ、成程、その時こそ鬚髭を墨に染め、若やいで勝負を遂げん。坂東声の首取らば、池の溜まりで洗ふて見よ。軍の場所は北国篠原、加賀の国にて見参々々」

「実にその時にこの若が恩を思ふて討たすまい」

「生き長らへて居つたらば、この親父めが御旗持」

「兵糧炊くは私が役」

「首斬る役はこの手塚」

「ホ、ウ、互ひに馬上でむんずと組み、両馬が間に落つるとも。老武者の悲しさは、軍に仕疲れ、風に縮める古木の力も折れん。その時手塚」

「合点々々」

「ついに首をも搔落とされ、篠原の土となるとも、名は北国の巷ちまたに上げん。さらば〜」

と引き別れ、帰るや駒の染手綱、隠れなかりし弓取りの、名は末代に有明の、月もる家を後になし、駒を早めて立ち帰る

ほんちようにじゅうしこう

本朝廿四孝

〔解説〕

明和三年（一七六六）大坂竹本座にて初演。近松半二ほかの合作による、五段構成の時代物です。將軍足利義晴を殺害した斎藤道三らを討ち取るため、長尾謙信と武田信玄は互いに反目しているように見せかけ、目的を遂げる、というのが主筋です。諏訪湖の御神渡りの伝説を踏まえた四段目の「十種香」「奥庭狐火」は、特に有名です。

〔あらすじ〕

（長尾・武田両家の仲を取り持ったため、信玄の嫡子勝頼と、謙信の娘八重垣姫が許嫁となりますが、勝頼は足利將軍を討った犯人を捜し出せなかったことから切腹してしまいます。しかし、切腹した勝頼は替え玉で、本物の勝頼は花作りの養作に姿を変え、長尾家に召し抱えられます。）

〈十種香の段〉八重垣姫は、切腹したと聞かされている許嫁の勝頼の絵姿を前に、回向しています。また、身代わりとなって切腹した偽勝頼の恋人であった腰元の濡衣も、亡き恋人を偲んでいます。そこに、花作りの養作に

身をやつした勝頼が現れます。勝頼の絵姿にそっくりの蓑作に、八重垣姫は思わず縋りつきますが、勝頼は、自分には蓑作であると言います。そこで八重垣姫は、蓑作との恋の媒を濡衣に頼みますが、濡衣はその代わりに、長尾家が武田家から借りたままになっている重宝「諏訪法性の兜」を盗み出すように言います。そのことから、八重垣姫はやはり蓑作こそ勝頼であると悟りますが、勝頼は真実を話しません。八重垣姫が自害の覚悟を示すと、ようやく蓑作は勝頼であることを認め、二人は抱き合います。

そこへ謙信が現れ、蓑作に、信濃の塩尻へ文箱を届けるよう命じます。急いで発った蓑作に、追っ手を差し向ける謙信。蓑作が勝頼であることを見破っていて、勝頼を討つというのです。八重垣姫はやめてくれるよう必死で願いますが、謙信は武田方の間者である濡衣を引っ立てて行ってしまいます。

十種香の段

臥所へ行く水の
ふしど

流れと人の簀作が姿見かはす長袴、悠々としてひと間を立ち出で

「我民間に育ち人に面を見知られぬを幸ひに、花作りとなつて入り込みしは、幼君の御身の上にもし過ちやあらんかと余所ながら守護する某、それと悟つて抱へしや。ハテ合点の行かぬ」

と差し俯き、思案に塞がるひと間には、館の娘八重垣姫、許嫁ある勝頼の切腹ありしその日より一間所に引き籠り、いかなずけ床に絵姿かけまくも御経誦の鈴の音。こなたも同じ松虫の鳴く音に袖も濡衣が、今日命日を弔ひの位牌に向かひ手を合はせ

「広い世界に誰あつて、お前の忌日命日を弔ふ人も情けな

や。父子の悪事も露知らずお果てなされたお心を、思い出す程おいとしい。さぞや未来は迷うてござらう。女房の濡衣が心ばかりのこの手向け、千部万部のお経ぞと申うて成仏して下さんせ。南無阿弥陀仏くなまいだ」

「誠に今日は霜月廿日。我が身代りに相果てし勝頼が命日。暮れ行く月日も一年余り。ひととせ南無幽霊出離生死頓生菩提」

「申し勝頼様、親と親との許嫁、ありし様子を聞くよりも嫁入する日を待ちかねて、お前の姿を絵に描かし、見れば見る程美しい。こんな殿御と添ひ臥しの身は姫御前の果報ぞと月にも花にも楽しみは、絵像の傍で十種香の、煙も香花となつたるか。回向せうとお姿を絵には描かしはせぬものを、魂返す反魂香、名画の力もあるならば可愛とたたひと言のお声が聞きたいく」

と絵像の傍に身を打ち伏し、流涕焦がれ見え給ふ

「あの泣き声は八重垣姫よな。我が名を呼びし勝頼を、誠

の夫と思ひ込み、弔ふ姫と弔ふ濡衣。不憫ともいぢらしとも言はん方なき二人が心」

とそゞろ涙に暮れけるが

「ア、我れながら不覺の涙」

と襟かき合せ立ち上る、後にしよんぼり濡衣が

「申し簀作様、合点の行かぬはあなたのお姿。どうしたことでこの様に」

「ホ、不審尤も。計らずも謙信に抱へられたる衣服大小」

「テモさても衣紋付なら袴の召し様迄、似たとは愚かやつぱりそのまゝ。形見こそ今は仇なれこれなくば、忘るゝこともありなんと詠みしは別れを悲しむ歌。形見さへぢやに我が夫に微塵変はらぬこのお姿。見るにつけても忘れぬ、私や輪廻に迷うたさうな。御赦されて」

と伏し沈む。泣く声洩れてひと間には不審立ち聞く八重垣姫、そつと襖の隙間洩る姿見紛ふ方もなく

「ヤア我が夫か勝頼様」

と飛び立つ心押し鎮め

「正しうお果てなされしもの、似たと思ふは心の迷ひ。絵像の手前も恥づかし」

と立ち戻つて手を合はせ、御経読誦おのけいよみの鈴の音。勝頼公は濡衣が心を察して声曇り

「儂わがき女の心から嘆くは理さりながら、定めなき世と諦めよ」

と諫むる詞。こなたには心空なるその人の『もしや存へおはすか』と思へば恋しく懐かしく、また覗いては絵姿に見比べる程生き写し

「似はせでやつぱり本々の勝頼様ぢやないかいの」

と思はずひと間を走り出で、縋り付いて泣き給へば『ハッ』と思へどさあらぬ風情

「こは思ひ寄らざる御仰せ。我ら簀作と申す花作り、漸う

只今召し抱へられ衣服大小改めし新参者。勝頼とは覚えなし。ご粗相あるな」

と突き放せば

「ム、何と言やる。今父上に抱へられし新参者花作りの簀作とや。自らとしたことが余りよう似た面差の、もしやそれかと心の煩悩。二人の手前恥づかしながら、コレ濡衣この簀作とやらいふ人を、そなたは疾うから近付きか」

「エ、」

「いやいの、知る人であらうがの」

「アノお姫様としたことが、たつた今見えたお人。何のママ私が」

「イヤ隠しやんな今の素振り。忍ぶ恋路といふ様な可愛らしい仲かいの」

と思ひも寄らぬ詞にびつくり

「オ、お姫様としたことが、まだお子達と思ひの外、大そ

れたアノ簀作殿を」

「サア見初めたが恋路の始め。後とも言はず今こゝで」

「媒なかつちせいと仰るのか、我折れ。ほんに大名のお娘御とて

油断はならぬ恋の道。品によつたらお取持ちいたしませうが」

「コレく濡衣、必ず粗相言ふまいぞ」

「サア、何もかも私が吞み込んで、ナ吞み込んでお取り持ちをいたすまいものでもないが、真実底から簀作殿に、ご執心でござりまするか」

と問はれてなほも赤らむ顔

「勤めする身はいさ知らず、姫御前のあられもない。殿御に惚れたといふことが嘘偽りに言はれうか」

「そのお詞に違ひなくば、何ぞ確かな誓紙の証拠。それ見た上でお媒なかつち」

「オ、それこそ心易いこと。その誓紙さへ書いたらば」

「イエ／＼、それもこつちに望みがある。私が望む誓紙といふは、諏訪法性の御兜。それが盗んで貰ひたい」

「ヤア何と言やる。諏訪法性の御兜を、盗み出だせと言やるのは、さてはあなたが勝頼様」

と言ふ口、押へて

「ハテ滅相な勝頼呼ばはり。微塵覚えのない簀作、粗相ばし宣ふな」

と、言ふ顔つれ／＼打ち守り

「許嫁ばかりにて枕交はさぬ妹背中、お包みあるは無理ならねど同じ羽色の鳥翅。人目にそれと分からねど親と呼び、また夫鳥と呼ぶは生しょうある習ひぞや。如何にお顔が似ればとて恋しと思ふ勝頼様、そも見紛ふてあられうか、世にも人にも忍ぶなる御身の上と言ひながら連れ添ふ私に何遠慮つひかう／＼とお身の上、明かして得心さしてたべ。それも叶はぬことならばいつそ殺して／＼」

と縋り付いたる恨み泣き。勝頼わざと声荒らげ

「ヤア聞き分けなき戯れ事。如何程に宣ふとも、覚えなき身は下司下郎。余所の見る目も憚りあり。そこ退き給へ」と突き放せば

「スリヤどの様に申しても、勝頼様ではおはさぬか。ハア、『ハツ』とばかりに簀作が、差添逆手に取り給へば『コハ御短慮』と留むる濡衣

「イヤ／＼放して殺してたも。勝頼様でもない人に戯れ事の恥づかしや。心の穢れ絵像へ言訳。どうも生きてはゐられぬ」

とまた取り直すを、なほも押し止め

「オ、さすがは武家のお姫様、天晴れなるお志、そのお心を見るからは勝頼様に逢はせませう。ソレそこにござる簀作様がご推量に違はず、あれが真の勝頼様。ちやつとお逢ひなされませ」

と突きやられてはさすがにも初めの恨み百分一『聞えませぬ』が精一杯、後は互ひに抱きつきつひ濡れ初めに、濡衣も、心ときつく折柄に。父謙信の声として

「簀作はいづれにをる。塩尻への返答、時刻移る」

と立ち出づれば、『ハッ』と簀作飛び退り

「お支度よくばすぐさま参上」

「ホ、委細の事はこの文箱に。片時へんじも早く罷り越せ」

『ハッ』と領掌、文箱携へ塩尻さして急ぎ行く。跡に不審

は八重垣姫

「申し父上、ことごとくしい今の有り様。何事やらん」

と尋ねれば

「ホ、あれこそは武田勝頼討手の人数」

「ナニ、勝頼様を討手とは。コハそも如何に何故ゆゑ」

と驚く二人を、はつたと睨めつけ

「諏訪法性の兜を盗み出さんうぬらが巧み、物陰にて聞い

たるゆゑ、勝頼に使者を言ひ付け帰りを待つて討ち取らさんと、示し合はせし討手の手配り」

「エ、そんなら今の討手の者は勝頼様を殺さん為か。ハア

ハッ」

とばかりにどうど伏し

「今日は如何なることなれば過ぎ去り給ひし我が夫に再び

逢ふは優曇うどんげ華と悦んでゐたものを、またも別れになること

は、何の因果ぞ情けなや。父のお慈悲にお命を、どうぞ助

けて給はれ」

と口説き嘆くに、目も遣らず

「ヤア武田方の廻し者、憎き女」

と濡衣引つ立て

「うぬには尋ぬる子細あり、奥へ失せう」

と小腕こがいな取り、情け容赦も荒氣の大将、帳台深く入り給ふ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

